HACHINOHE GAKUIN

# CAMPUS八戸学院

vol.49

## 未来への学び

特集
未来へと踏み出すチカラを育てる

八戸学院カーテル高校開校式

Is English really taught as a Foreign Language in Australia?

図書空間
想像力と創造力を養う
本との出会いは明日の糧になる

学校法人光星学院

# 未来への学び ～八戸学院美保野キャンパス～

- 八戸学院大学
  - 地域経営学部
    - 地域経営学科
  - 健康医療学部
    - 人間健康学科
      - スポーツ学科コース
      - 教育職プログラム（保健体育）
      - トレーニング指導者プログラム
      - 健康科学コース
      - 教育職プログラム（養護・保健・看護）
      - 認定心理士プログラム
      - 社会福祉プログラム
    - 看護学科
- 八戸学院大学短期大学部
  - 幼児保育学科
  - ライフデザイン学科

八戸学院大学

八戸学院大学短期大学部

【特集】
# 未来へ踏み出す チカラを育てる



## CONTENTS


3 【特集】
未来へ踏み出すチカラを育てる

8 理事長・学長×学生対談

10 八戸学院カーテル高校開校式

12 Is English really taught as a Foreign Language in Australia?
英語＝国語⁉ オーストラリア

14 八戸学院 TOPICS

16 八戸学院３幼稚園マスコットキャラ
ステラが行く

18 図書空間
想像力と創造力を養う
本との出会いは明日の糧になる


## 地域のスポーツ、健康増進に貢献

### 大塚製薬株式会社×光星学院連携協定締結［5/28］

吉川佳克 大塚製薬仙台支店長（左）

この度、大手医薬品・食品メーカーの大塚製薬仙台支店とスポーツ振興および健康増進に関する包括連携協定を締結しました。

協定内容は、健康増進やスポーツ振興、生活習慣病予防や熱中症対、食育、災害対策など７項目におよび、今後、トップアスリートによる講演会や食育講座など展開予定で、園児・生徒・学生・保護者や地域住民の健康意識の向上を目指します。

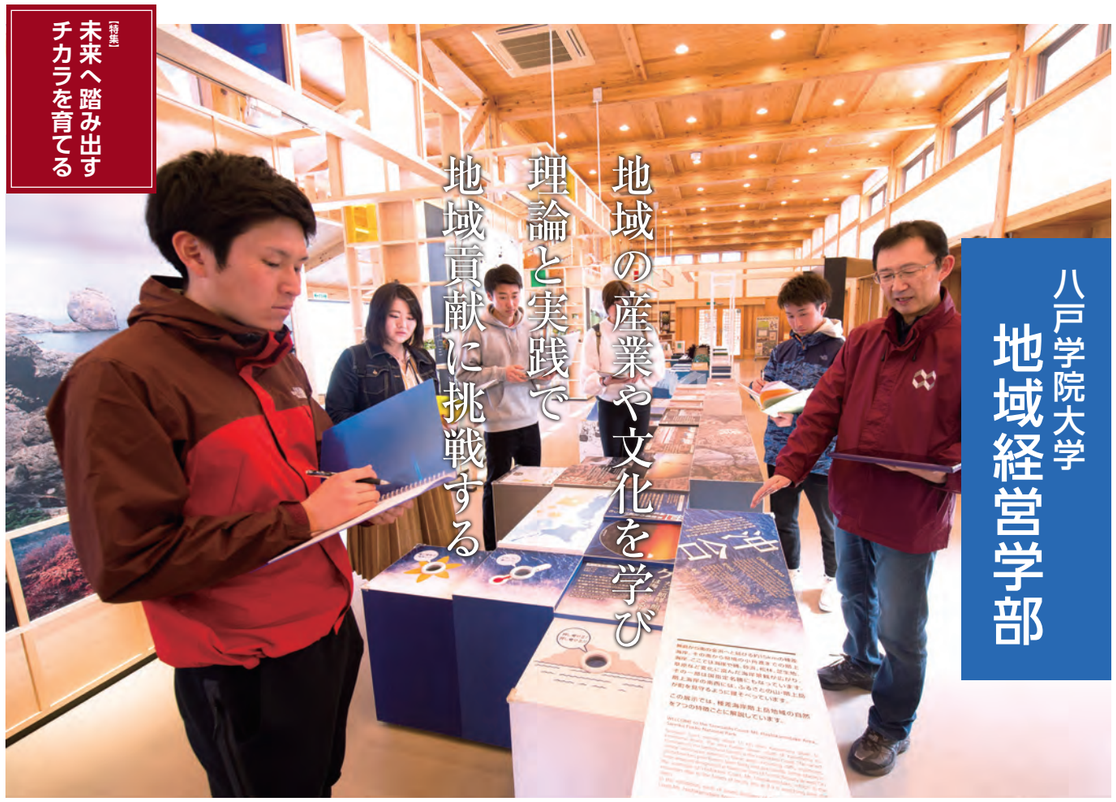

CAMPUS
八戸学院
vol.49

**表紙**
未来をつくるチカラ

**建学の精神**
**「神を敬し、人を愛する」**
カトリックの精神に則る道徳教育を施し、高尚なる人格の完成を期し、現代社会が要請する有為の人材を育成することをもって目的とする。（寄附行為 第３条）


●八戸学院大学
TEL 0178-25-2711
●八戸学院大学短期大学部
TEL 0178-25-4411
●八戸学院地域連携研究センター
TEL 0178-25-2789
●八戸学院図書館
TEL 0178-30-1695
●八戸学院光星高等学校
TEL 0178-33-4151
●八戸学院光星高等学校専攻科
TEL 0178-25-6322
●八戸学院野辺地西高等学校
TEL 0175-64-4166
●八戸学院幼稚園
TEL 0178-34-5765
●八戸学院聖アンナ幼稚園
TEL 0178-45-3670
●八戸学院第二しののめ幼稚園
TEL 0178-25-2488

http://kosei.hachinohe-u.ac.jp/



# 八戸学院大学 地域経営学部

## 地域の産業や文化を学び 理論と実践で 地域貢献に挑戦する

八戸学院大学
地域経営学部 学部長
**大沢　泉**

２０１８年度から地域経営学部地域経営学科がスタートしました。八戸大学商学部からスタートしてビジネス学部に名称変更したあとも、ベースにあったのは商学・経営学です。そして、教員の研究や学生の学習においても、地域への貢献、地域との連携という視点を常に大事にしてきました。そうした実践を継続してきた中であらためて、地域経営という特徴を打ち出した「地域経営学部」が誕生しました。

地域の活性化だけに留まらず、地域の安全、防災、医療、町おこしなどを含めた包括的な概念として「地域経営」を学ぶ場であるということがこの名称に込められています。

地域経営学部では、地域経営領域と情報会計領域の２つを柱に様々な地域課題に挑戦します。また、４年間を通したキャリアデザイン教育に着手することで人格形成に大きな役割を果たすものと期待しております。

八戸は交通機関や物、観光資源、産業の歴史、文化など魅力がたくさん詰まっており、それら地域資源を活用して様々な挑戦が可能です。地域を舞台に、地域資源をビジネス視点でとらえ、地方都市の今後の地域づくりに貢献できる人材を育成することが地域経営学部に課せられた使命であり、経営感覚と地域を見つめる眼差しの両方を合わせ持つような若いリーダーを育てていきます。

地域を学び、世界を学ぶ。それが地域経営の大きな視点であり、そういった希望を持った学生たちと一緒に問題に取り組み、学んでいきたいと思います。

# 八戸学院大学 健康医療学部

## 未来への学び 地域の人々の心と 身体の健康に 寄与するために

八戸学院大学
健康医療学部 学部長
**遠藤　守人**

人間健康学科と看護学科の２学科で構成される健康医療学部は、今年度で３年目を迎えました。これから「命の世紀」を象徴する学部として展開していくために揺籃期である現在、しっかりとした基盤づくりを進めることが重要であると考えています。

本学部に入学してくる学生の多くは、資格取得を目的としています。看護学科における看護師・保健師はもちろんですが、人間健康学科においても保健体育教諭や養護教諭、あるいは社会福祉士といった免許・資格の取得を見据えた教育体制の整備を継続していくことが、学生に対するキャリア形成支援の面からのみならず、客観的な「大学教育の質」保証といった観点からも極めて重視すべきポイントになります。これまでの実績をもとに、学生ニーズに耳を傾けながら随時カリキュラム変更等を行って一層の充実を図っていく予定です。

また、変化し続ける現代社会において、新たに生じてくる課題の多くは未知の領域にあります。それらを解決していくためには、既成概念にとらわれることのない豊かな想像力と積極的な挑戦心が不可欠です。すでに確立されている健康医療分野の専門的知識や技術を習得するだけでなく、いかに多くの教養を身に付け、応用し得るかが求められます。さらにグローバル化が進む社会状況では、保健・医療・福祉についても、世界的視点で思索できるような土壌を培うことが必要になると認識しています。以上のことを念頭に置いた上で、本学ならではの地域をキャンパスとしたフィールドワークや実習を通した教育研究を実践していくことになります。地域特性を確実に把握し、健康医療の様々な課題に対して主体的な向上心を持って対処できる人材を育てることが、これからも本学部の責務であることは言うまでもありません。

健康医療学部は、人間健康学科と看護学科の連携による相乗効果を発揮し、地域の人々の健康を支える教育研究拠点として着実に発展・成長していきたいと思います。

# 八戸学院大学 短期大学部

## 地域と連携した実習で 実践力を養成 子どもたちを慈しむ 豊かな心を大切に

八戸学院大学
短期大学部 副学長
杉山 幸子

短期大学部には幼児保育学科とライフデザイン学科があり、幼児保育学科では卒業生のほとんどが保育所、幼稚園、認定こども園、その他の福祉施設に就職します。

2年間で「人を育てる」専門職者へと成長するのは、考えてみるとずいぶん大変なことです。保育の専門性には、子どもの話を聴いて心情に寄り添う、遊びながらを引き出すというように、日々の生活に根ざすものが多く含まれるため、専門的な知識や技術を身につけることが、人間性を磨くことと切り離せません。また、発達に偏りのある子どもと関わる技術や、保護者への支援も求められます。そうした未来に向けて、学生は計50日間の実習を含め、慌ただしい毎日を駆け抜けていきます。その中に、さまざまな行事が盛り込まれているのが幼児保育学科の特徴でしょう。砂浜彫刻では工夫を凝らした砂の塑像を作り、学生祭では子どもが遊ぶスペースを企画運営します。八戸七夕祭りで吹き流し制作と流し踊りに参加したり、「はちのへ子どもフェスタ」でミニオペレッタ公演を行ったりと、公の場でも学びの成果を披露します。幼児教育の基本は「遊びを通しての学び」ですが、学生もまた、全力で楽しみながら学んでいるのです。

一方、ライフデザイン学科での学びは、学生それぞれが何を学ぶかを選択することから始まります。そのために、教育課程に複数のコースが設定されているだけでなく、求めることでさらに機会を広げられるのが特徴でしょう。毎年、たくさんの資格を取得する学生がいますし、早くから八戸学院大学の科目を履修して、四年制大学に進学する学生も少なくありません。また、今年は新たに始まった制度を利用し、フィリピンに英語の語学留学をした学生、市内の別の大学に中国語を学びに行っている学生もいます。ライフデザイン学科は今年、2年生のみの在籍になりましたが、自分の未来をデザインするために、チャレンジ精神を存分に発揮している姿が見られます。

# 八戸学院 国際教育局

## 「八戸の教育機関」から「ASEANの教育人材育成機関」へ

八戸学院大学
国際教育局 局長
大谷 真樹

新年度から、幼稚園から大学まで全ての施設の国際教育を担う新しい部局である国際教育局が設置されました。また成長著しいアセアンのフィリピンでは、海外の学校法人と初の共同運営による八戸学院カーテル高校が6月に開校し、合宿型マンツーマン語学学校の老舗であるCNE1語学学校も私たちのグループ施設となり、現地には八戸学院職員が常駐する体制となりました。以前からの国際交流はもちろん、2年前から推進している世界最大43都市に留学可能な語学学校EFとの連携など、私たちは地方私学でも傑出した恵まれたグローバル教育環境を着々と整備しています。また法人出資で新たにスタートした株式会社八戸学院グループは、教育を軸に海外と日本の人材育成紹介などを事業化し、世界の課題と日本の課題を先取りし解決する取り組みに踏み出しました。

私たちは、この大きな変節点を迎えている地方私学の中で果敢に教育事業と関連事業を未来に向けて再構築、自らの定義を「八戸の教育機関」から「ASEANの教育人材育成機関」と再定義することとしました。相互の課題の解決のみならず、日本とASEANのより良い関係を築く最も重要な人材の架け橋となると確信しています。八戸学院の園児生徒学生諸君にはこの恵まれた環境を大いに生かし、地域から世界へ視野を広げ真の国際教養を身につけ大いに成長していただき大きな舞台で活躍していただきたいと思います。地域のリーダーこそグローバル教養が問われる時代です。これからグローバルで生きるために必要なのは「知識」ではなく変化への「適応力」です。修学旅行や短期留学のたった一度の機会で英語をはじめ学べる知識は限りがありますが、きっと無限の「適応力」へのきっかけを得ることができるでしょう。可能性の扉を開こうとしている諸君のお手伝いをするのが国際教育局です。

# 理事長・学長×学生　座談会

～法官新一 理事長・学長と八戸学院大学・短期大学部学生が学生生活や将来について座談会を開催～

平成30年５月11日学長室にて

**法官 新一**
学校法人光星学院理事長
八戸学院大学・短期大学部学長

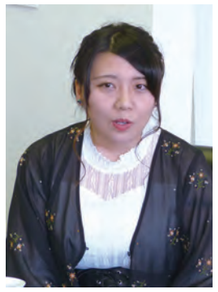
今年度より学長という新たな職務を担うことになりました。八戸学院大学・短期大学部に対する地域からの期待を感じています。大学は、学生の皆さんあっての学校であり、まず、美保野キャンパスで学生生活を送る皆さんの生活や将来について聞かせてください。

**山田 和華子**
地域経営学科１年
青森県出身

将来、地元むつ市でジオパークに関わる仕事がしたく、地元の様子を観察しながら経営を学べる八戸学院大学を志望しました。入学して間もないですが、授業はもちろん、先生方から様々な話を聞いていろんなことを吸収したいです。

**畑中 大河**
看護学科２年
青森県出身

地元八戸で伝統芸能を10年続けていて、伝統芸能活動を続けながら看護師を目指せる看護学科を志望しました。先生との距離が近く、看護師時代の体験談などとても勉強になります。将来は、専門看護師の資格にもチャレンジしてみたいです。

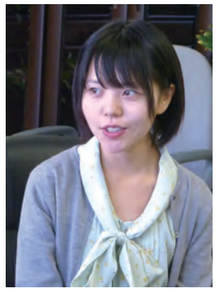


**木村 葉月**
幼児保育学科２年
青森県出身

保育士になることが夢で光星高校に進学しました。高校在学中に系列校でもある八戸学院短期大学部の話を聞き、進学しました。入学してからは学ぶことも多く、何より子どもの命を預かる責任の重さを感じています。昨年の実習で児童養護施設に行ってから施設に興味が湧いています。

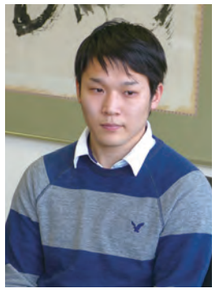
**太田 星雅**
ビジネス学科４年
青森県出身

高校からラグビーをやっていて、ラグビーを続けながら、将来に繋がるビジネスの勉強ができる環境が整っている八戸学院大学に進学しました。実家が会社を経営しているのでここで学んだことを活かしていければと思います。



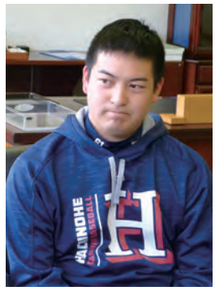
**宮澤 日向子**
ライフデザイン学科２年
青森県出身

高校３年の時にこれから自分が何をしていきたいか明確に決められず、幅広い分野を学べる「ライフデザイン学科」に進学しました。入学後は、学生会での活動やビブリオバトル出場、海外研修など様々なことに挑戦する機会に恵まれ、貴重な体験ができました。



**中村 健**
ビジネス学科３年
神奈川県出身

高校時代に野球をしていて、声をかけていただいたのがきっかけで八戸学院大学に進学しました。現在、学友会の執行委員長をしていますが、みんな元気が足りないなあと思います。学園祭などイベントを通して元気と活気が溢れるようなキャンパスにしたいです。



**今田 誠二**
ビジネス学科４年
大阪府出身

野球で全国を目指せる大学に進学したいと思い、八戸学院大学に進学しました。

自分が入学した年に室内練習場が完成して、冬でもボールを使った練習ができる環境に感謝しています。今年度で卒業なので全国大会に出場したいです。

**長谷川 瑞穂**
人間健康学科３年
青森県出身

子どもの心のケアができる養護教諭を目指していて、心理学や心のケアについて学べる人間健康学科を志望しました。入学してから、心理学以外にもスポーツや健康など様々な専門領域を学ぶことができ、充実しています。

地域・国際社会に貢献

# 八戸学院カーテル高校開校式

平成30年 6 月13日

八戸学院カーテル高校開校式にて

フィリピン・サンマニュエル市において「カーテル科学教育財団」と共同運営する中高一貫校「八戸学院カーテル高校」の開校式が同校で挙行されました。式は、多数のご来賓の祝辞と生徒によるお祝いのアトラクションが披露され盛大なセレモニーとなりました。

開校式では、法官理事長が「日本とフィリピンの若者が絆を深め、共に発展することを願っている」と挨拶。これに対し、カリートカーテル科学教育財団理事長は、「多くの若者に教育の重要性を伝え、教育の機会を与えたい」と話しました。

式終了後には、日本語の模擬授業が行われました。同校では、フィリピンの若者に対し、日本語と日本文化の学習を重視したカリキュラムを展開し、日本で活躍できる人材の育成を目指します。

法官理事長挨拶

**【記念アトラクション】**
カーテル高校の生徒による開校を記念した様々なアトラクションが発表されました。

**【記念品贈呈】**
八戸の郷土品である八幡馬を贈呈しました。

**【新設教室除幕式】**
新たに新設された教室の除幕式が行われました。

**【模擬授業】**
式終了後には、新設された教室で日本語の模擬授業が行われ、挨拶の基本を学びました。

# Is English really taught as a Foreign Language in Australia?

**英語＝国語!? オーストラリア**

## Synopsis はじめに

Over my twenty year career, I have taught kindergarten, primary, middle, senior secondary, tertiary and adult students in Japan and Australia. Regardless of age, level, nationality or gender, the majority of my students find English spelling challenging. With my own personal experience of overcoming spelling difficulties, I am not surprised that spelling continues to baffle students, both non-native and native English speakers alike. As a teacher, currently instructing students in spelling strategies at primary and secondary levels in Far North Queensland, Cairns, I can draw some obvious contrasts, but also some surprising similarities between learning English as a Foreign Language in the contexts of Australia and Japan.

英語という言語の習得は、年齢、学年や性別そして国籍に関わらず学習者にとって容易なものではない。私の 20 年以上にわたる日本とオーストラリアでの英語教育の指導経験をもとに両国における英語指導の相違点や意外な共通点を探ってみる。

## How is English taught in Japan? 日本での英語教育

English is taught as a compulsory subject in primary and secondary schools in Japan. Rather than as a means for communication, English education in Japan is an exercise in mental rigour. Classes are conducted mostly in Japanese, rather than in the target language of English. Grammar and spelling rules are taught logically, systematically and explained in detail in Japanese, by the native Japanese speaking teacher. To complete a test typically handed out in the Japanese classroom, one would need a deep understanding of both spoken and written Japanese. Students will often be asked to write a detailed explanation of a particular grammar rule in Japanese to demonstrate their understanding. For the majority of students in Japanese high schools, particularly in rural areas such as Hachinohe, opportunities to speak face-to-face with English-speakers are often limited.

小中高において必修科目である英語は、主に日本人教師により文法やスペリングを中心に論理的に、体系的に日本語で指導される。そのため、学習者には高い日本語の運用能力も必要となる。地方都市の高校では、生徒のほとんどが英語を使用して英語母国語話者と会話する機会は多くはない。

## Are Japanese students of English better spellers than native-English speakers? 日本の生徒の方がスペリングが得意？

While Japanese teachers of English may be criticised for restricted capabilities in conversational English, I would contest that their knowledge of grammar and spelling rules rival that of most native-English speakers. Having learned English as a first and only language, naturally as a child through exposure to the English speaking world, English for the majority of Australians is acquired unconsciously. On the other hand, to learn a second language, a conscious effort is mandatory. As research by Rod Ellis (1997) demonstrates, Second Language Acquisition requires a detailed understanding of how language works. Preciously because most Japanese teachers have studied English consciously, they have a better understanding of grammar conventions than most native English speakers. This knowledge is transferred to the student via instruction in the native language of Japanese. I would argue that because of this, students taught in the Japanese system are better English spellers that the average Australian student educated in Australia.

日本人英語教師の英語文法に対する理解は、英語母国語話者より優れていることが多い。無意識のうちに“言葉”として英語を習得する母国語話者とは大きく異なり、外国語として学習する場合、細かな文法や語彙の理解が不可欠であるといわれ、意識的な努力が必要とされる。このことから平均的なオーストラリア人生徒より日本の生徒の方がスペリング能力が優れているのでは、と考えることもある。



## How is English taught in Australia? オーストラリアでの英語（国語）教育

Just as Japanese students are learning English as a Foreign Language, so too are many Indigenous Australians. Surprising to many, the language of the classroom or Standard Australian English (SAE), is not always the first language learned by many Aboriginals. Like students in Japan, these Indigenous students' exposure to "school" English is limited to the classroom. However, unlike the Japanese, instruction in the Australian classroom is not in the native language. In Japan, teachers share a common bond with their students of learning English as a Foreign Language. Japanese teachers are well versed in English grammar conventions. In contrast, the majority of teachers in Indigenous Communities have come from outside of the community. In other words, the imported teachers have learned SAE as their first language, whereas the students are learning SAE as a Foreign Language. Furthermore, as the teacher has learned SAE naturally and unconsciously, many have restricted understanding of how to teach spelling rules and grammar conventions. To make matters worse, teachers are often unaware that their students are learning SAE as a Second Language.

日本人にとって英語が外国語であるのと同様に、多くのオーストラリア先住民にとって英語（オーストラリア標準英語 SAE）が第 1 言語であるとは限らない。彼らの中には英語に接するのは、学校の授業のみという生徒もいる。英語が母国語の教師が、英語を第 2 言語とする先住民の生徒たちに彼らの第 1 言語で英語を指導することはないし、英語を外国語として指導するような特別な英語教授法を習得していることもない。さらに第 2 言語としての英語指導の必要性に全く感知しない教師もいるのが実情である。

ケアンズのビーチ（グレートバリアリーフ世界遺産）

I have described some of the obvious contrasts and shocking similarities of teaching English as a Foreign Language in Japan and Australia. Perhaps the observations I have made are obvious to those who view them from a distance. Up close, our vision is blurred and it is difficult to see a solution. There is benefit in standing back and turning to Japan, to take note of how native Japanese speakers teach English as a Foreign Language. Australian educators would do well to take note of the strong handle Japanese teachers have on the standard language.

英語指導の問題に関して、日本とオーストラリアには意外な類似点と明らかな相違点が存在する。個々の問題解決は簡単ではないが、オーストラリアの教師達も日本における英語指導法から学び得ることも多々あるのではないか。

**Jodie Hogan**（八戸学院地域連携研究センター客員教授）

Jodie Hogan is an Associate Lecturer with Hachinohe University. Her teaching career spans over 20 years. In 1998-2001 she was an Australian ambassador on the Japanese Exchange Teaching Programme, teaching English at various kindergartens, primary, middle and high schools in Sannohe and Hachinohe. She obtained a Master of Education (Teaching English to Speakers of Other Languages) in 2003. After living in Japan for 8 years, she now resides with her Japanese husband, son and daughter in Far North Queensland, Australia.

日本とオーストラリアで幼稚園から大学まで 20 年以上にわたる教育現場での経験を重ね、八戸大学（現：八戸学院大学）では平成 14 年から平成 20 年まで「英語コミュニケーション」などを担当。現在、オーストラリア ケアンズに在住。

## 短　大　フィリピン短期留学（3月3日～4週間を終えて）

学校法人光星学院が包括協定を結んでいるフィリピンの語学学校CNE1に本学の学生が短期留学しました。参加した学生は、「興味を持っていましたが、不安で留学をためらっていました。しかし、セキュリティーガードや日本人スタッフもいるという話を聞き、またゼミの三浦文恵先生に後押しをいただき、思い切って参加しました。」と参加を決めた理由を語ってくれました。また、期間中は語学学習をする中で、先生や他の生徒全員が英語でコミュニケーションをとることによって仲が深まったようです。そのことから、放課後や休日に観光地を訪れたり、海で泳いだり、買い物やレストランにみんなで出かけたりと、語学学習以外も充実していたようです。帰国後の感想を聞いてみると「現地で得た経験を生かして、今後の就職に活かしていきたい。」「自分にしかできない体験をしたことに自信を持ちたい。」という声があがっていたので、参加した学生たちの今後の成長が楽しみです。

## 野西高　地域リーダーから若者へのメッセージ
### 金子ファーム代表取締役 金子春雄氏［4/27］

七戸町の金子ファーム代表取締役の金子春雄氏を講師にお迎えして「夢をつかむために」の演題で入学記念講演会が行われました。

金子氏は約59億円の年間売上高を誇る優良企業の代表。起業した肥育牛部門の苦労や、現在の生産から販売まで一本化して進める「六次産業化」への取り組み、多角経営の歩みなど多彩な内容でした。

「薬を使わないお肉作り」、「売りに行くより買いに来てくれる肉作り」、つまり国が認めたとしても、自分達が家族に安全に食べさせることができる肉を朝2時に見回るなど、地道に作っていくことが大切である。」と生徒に向けて発せられたメッセージは、常に創意工夫や研究を重ねる金子氏の熱い心のこもったものでした。成功者の極意を感じた一日でした。

また、地域とのつながりも金子氏は大切にされ、「悪臭」との苦情を牛舎周辺の環境へ配慮し夜明け前に作業を終了させて、地域の苦情を解消するなど、努力を重ねられています。

さらに、同業の酪農家を助けるために共同経営を行い、その牧場の数は30を数えます。「地域とともに」の経営姿勢が感じられました。

最後に、「常に勉強が仕事」、「努力した人は将来必ず評価される」「けんかは何も生まない。人と誠意をもって話をすることが大切」と強く説き講演を終了しました。

## 光星高　貧困とともに生きる子どもたちの現状を知る（SDY 出前講座）

特別進学コース・医療看護進学コースにおいて、『SDY出前講座』を開催しました。SDYが実践しているフィリピンでの支援活動をとおして、行政の手の届かない貧困と共に生きる子供たちの現状を詳しく知ることができました。生徒たちも、いままで詳しく知る機会がなかった貧困層の現状や、初めて見るフィリピンの子供たちの生活環境に少なからず衝撃を受け、今回の講演に感激していました。劣悪な環境のなかでも純真な心を持ち続け、笑顔を絶やさず、互いを思いやる気持ちを持って家族で助け合って一生懸命に生きる子供たちの姿に、精神的な豊かさやボランティアの大切さなど、みな改めて深く考える貴重な機会となりました。

## 光星高　次世代エネルギーに学ぶ（六ヶ所村次世代エネルギーパーク見学）

特別進学コース・医療看護進学コースにおいて、『六ヶ所村次世代エネルギーパーク施設見学』に行ってきました。核融合エネルギー研究センターでは核融合反応のしくみ学び、発電炉建設に関わる重要な研究について見学しました。燃料となる水素は海水から無限に得ることができ、エネルギー効率がよいことなどを学びました。また、発電所の説明だけではなく、核融合反応は宇宙の恒星が誕生する過程でも起こっていることなど、核融合にかかわる興味深いお話も聞くことができました。青森県でも国際的な研究開発の一端を担う研究が行われていることを知ることができ、また、次世代エネルギーのあり方について理解を深めることができました。

## 専攻科　自動車科企業説明会［2/22］

自動車科1年生を対象に八戸学院大学会館において企業説明会が行われました。

説明会は、学生の進路に対する意識の高揚を図るものであり学生達が就職先を選択する時に大いに役だっています。

今回参加して頂いた企業の数は県内外合わせて9社でした。

ご多忙中にもかかわらず主旨賛同しご出席していただきました企業の皆様には深く感謝申し上げます。

## 専攻科　介護事例検討報告会［2/27］

介護福祉科2年生による事例検討報告会がに行われました。

報告会は、授業で学んだものを、実際の施設で実践し、その達成度や問題点、対策を考察するものです。

報告会では、各施設の実習指導者様より、日々の介護を振り返って分析し評価を積み重ねることが、より個別的な質の高い介護に繋がる。それを学生達が実践していると、講評を頂きました。

ご支援ご指導頂きました各事業所の皆様方に深く感謝申し上げます。

訃報　島守寿明氏（五月十四日逝去）享年72歳

学校法人光星学院監査室長として、本法人の監査体制の確立にご尽力いただきました。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

八戸学院３幼稚園
マスコットキャラ

# ステラが行く

vol.1

幼稚園の学び

教育面では、法人内連携教育として、八戸学院大学、八戸学院大学短期大学部の教員による直接指導（造形・リトミック・英語）や、外部講師によるより高度な指導（体育・音楽）を展開しています。

また、本園は、子どもに充実した教育・保育の場を与えたい、そんな保護者の皆様の思いに応えるべく、今年度より幼保連携型認定こども園として開園、1歳児からの受け入れがスタートし、子育てを応援して行きます。

## 八戸学院幼稚園

『あたたかく　やさしいようちえん』
～たくさんの出会いと一人ひとりが成長するための根っこを大切に！～

生まれて初めて出会う集団の場は、人格形成の基礎を培う大切な時期の子どもたちが過ごす場所です。人と関わり、様々なことを経験しながら、刺激を受けて成長をしていく子どもたちを優しく見守り、小さな「できた！」ということを見逃さずに共に喜び、子どもたち一人ひとりの生活と発達の連続性をしっかりと受け止めて、内に秘めている思いを大事にしながら、『根っこ』にある子ども自身の知識の始まりへの出会いを楽しみながら育てていきます。

## 聖アンナ幼稚園

穏やかで幸せな時間がここにある

子どもは生まれたその瞬間から外界からの学びが始まっています。生涯の中で最も敏感に物事を感じ、自分がやりたいことに心から夢中になれる幼児期。整えられた環境・たっぷりの時間・秩序のある自由を与えられた子どもは嬉々として仕事に向かい、心から満たされた良い表情になります。個々が充実し、育ちとともに見られるようになる周りへの気遣いや配慮。やさしさが作り出す平穏な空気の中、小さい子も見守られ、安心して自立に向かっていくことができます。聖アンナ幼稚園では子ども一人ひとりの幸せを願い「一人でできた！」という思いを大切にしながら手伝っています。急速な社会の変化の中でも子どもの発達そのものが変わることはありません。いつの時代も大人が子どもの良き理解者であるよう、教師と保護者が学び合い子どもにとって何が良いかを見つめていけるような幼稚園であり続けたいと思います。

## 第二しののめ幼稚園

「心と心の通い合う保育」

「豊かな保育・確かな成長」を教育方針に掲げ、体験や環境を通して子どもたちが「にこにこ・のびのび・すくすく・ぐんぐん」と成長できるように、いつも一人ひとりを大切に保護者の皆様と共に見守っています。

友だちや教師と関わる喜びを感じ、信頼感、心身の調和のとれた安心感の中で生活体験を積み重ね、やさしさ、思いやりの心を育んでいます。

自然体験・直接体験では、子どもの素直な気持ちや感動を描いたり、作ったり、話したり、歌ったりなど様々な表現活動へと導き、認め合いながら自信と個性を大切にしています。

子どもが出会う身近な環境、人との関わりを更に深め、いつまでもみんなの笑顔が広がる幼稚園でありたいと思います。

# ステラ・フォーカス

## 八戸学院幼稚園

『ウキウキワクワク！
胸が高鳴る春到来！』

青い空と風にたなびく鯉のぼり。そして、子どもたちが待ちに待った桜の季節となり、花びらを集めてフラワーシャワーなど自然を取り入れた遊びが広がりを見せています。大好きな園庭遊びがより一層楽しさを増し、喜びの歓声と笑顔でいっぱいです。

## 八戸学院聖アンナ幼稚園

『春の季節祭～桜を見に行こう！』

4月20日、お花見をするために美保野キャンパスへ出かけました。到着後、年長児は短期大学部の校舎の周りを散策し、木や花の名前を調べたり、手に取って匂いを嗅いでみたりしたあとは、木やコンクリートの模様をこすり出す写し絵をして自然と触れ合いました。年中児は大きな桜を見上げて絵を描きました。年少児と満3歳児は広い芝生の中で思いっきり走ることを楽しみ、満足そうな様子でした。

## 八戸学院第二しののめ幼稚園

『大きくなーれ桜の木』

大和ハウス主催による桜プロジェクトに参加しました。世界に向けて和の素晴らしさを伝えている和楽器奏者AUNの演奏鑑賞と、桜の植樹という貴重な体験をさせていただきました。

子どもたちは、「おおきくなーれ桜の木」と言ってみんなで声をそろえ、大きく育つことを楽しみにしながら、桜の植樹をしました。

# 図書空間

vol. 04

図書館長に聞く

# 想像力と創造力を養う 本との出会いは明日の糧になる

**本や図書館についてどのような想いがありますか？**

図書館は多様な知識である本が集積されている場で、その多様な知識に触れることのできる空間です。今、世の中では本離れが進んでいて、学生に限らず本を読まなくなったと感じているところです。今や本は電子書籍に変わりつつあるけど、やっぱり紙媒体としての文化はちゃんと残した上で、考えることの大事なツールとして「本とは大事だよ」と学生さんに伝えたいと思っています。

本は単なる文字情報だけじゃなくて、「明日も、もう一日生きてみよう」というモチベーションになるもので、今ベストセラーになっている「君たちはどう生きるか」（岩波文庫）は、私が八戸に赴任してきて31年目になるけど30年前にゼミのテキストとして学生たちと輪読した本です。今から80年前に書かれた本ですが、社会科学ってどういうことなんだろう？ということがすごく柔らかく書かれて、今の世の中の仕組みや、人と人との繋がり、勉強する意義など、一人ひとりがどうやって生きるのかを考えなくてはいけないということが書いてあります。感動したので要所要所に線を引いて、今でも私の研究室に残っています。

また学生の居場所としての図書館も大事だと思っています。本学は、周りに喫茶店とか遊び場がたくさんあるという環境じゃないし、どこか気軽に行けるロケーションでもありません。そんなときに図書館に行って、「ちょっとだけ賢くなろうか」と気軽に行けるような場所になってくれるといいなと思います。

大部分の学生にとって、大学図書館のサービスを最大限に享受できるのは、人生のうち限られた期間でもありますし、図書館を「自分事」として感じてもらえるように、発信と収集の両面で学生生活へ一層近づけていきたいと思っています。

**本から学んだことはありますか？**

私は本を読むことに関して、一番大事なことは「考える」ということだと思っています。「考える」とか「想像する」ということ。本を読み進めていく中で、行と行の間にその作者の言いたいことが隠されている点を見つけることが大事で、行間から魅力や、いろんなものを自分なりに想像したり読み解いたりして、その作者の生き様やエッセンスが得られたら、「そうか、こういうことを言いたかったんだ。だけど、ここはわかんない。」「なんでこの人はこんなことを言いたいんだろう？」とか考えるクセがつくし、そこでもっと深めてみよう、調べてみようと思えば、人間は一つ一つ進歩していくんじゃないかと思います。「考える」ということを止めれば人としての成長を止めることになりますからね。

小説などの本を読んで想像力を養うことができますが、「ソウゾウリョク」って、漢字で書くと2つあって、イマジネーションの「想像」と作り出す方の「創造」で、「創造力」は、イマジネーションを持つことで出来上がっていくものじゃないですか。今、日本で大きな課題の一つに、売れる商品がないとか、未だにヒット商品がないと言われていて、アイディアが出尽くしてる感があります。その課題を克服するのは、私は「想像力」からの「創造力」だと思っています。それは過去の歴史から学ぶことができ、本という活字媒体から得られます。本の中にも、そのヒントは残されているし、眠っていると思います。それについて考え、想像し、「創造」という明日の行動に繋げていくことが、人間を豊かにしていくと思っています。そういう意味で、本は明日、生きる糧になっているんですね。だから本を読むことって大事だと思うんです。

**八戸学院図書館との地域連携についての考えを訊かせてください。**

地域に開かれているというのは大切なことで、学生と教職員しか使えないというクローズな空間にはしたくはないですね。地域の方々の知的好奇心を刺激する魅力的な蔵書や書棚づくりをして、利用される方々の確固たる評価を得て八戸学院図書館がここに存在していることを知ってもらいたいと思います。

ただ、この美保野キャンパスは、市の中心地からのアクセスが遠く、そこをどのように克服するかがこれからの課題です。ある程度コストかけてもここまで来てもらうぐらいのイベントができればいいのですが、例えば幼児保育学科があるので、子供たちを集めて、読み聞かせのイベントだったり、あるいは看護学科の学生さんたちが、日常的な健康管理とか健康維持について、図書館の本を使って発表するとか。また東大図書館には、古本屋さんにしかない一冊2万円から3万円する本が所蔵されていたり、日大の図書館には地球上で最初の簿記の本である通称「スンマ」という初版本があったり、そんな目玉になるような貴重な資料が一つあるといいなあと思います。わざわざ中心街からお金をかけてバスに乗ってくるというぐらいの価値あるものが実はこの八戸学院図書館にあるんだと。理想ですけどね。

でも何かを得るために地域の方々が調べ考え、そして新たな知の創造や課題解決を「共同して行う」場所の一つとして、八戸学院図書館が「知の拠点」へ成長していけるようにしたいですね。特に市内だと社会科学系の本で、これだけの蔵書数がある図書館ってないですし、本を借りるだけじゃなくて、図書館と市民の交流できるように、人と本、人と人をつなぎ、「街づくりの拠点となる可能性に満ちた図書館づくり」を目指したいですね。

HACHINOHE GAKUIN | CAMPUS八戸学院 vol.49 | 【発行日】平成30年6月30日【発行】学校法人光星学院 〒031-8544青森県八戸市美保野13-98 TEL.0178-30-1411(代表) FAX.0178-30-1422



# 光星高校硬式野球部グラウンド「ダッグアウト」

美保野キャンパス光星高校硬式野球部グラウンドのダッグアウト（一塁側、三塁側の二箇所）がリニューアルしました。

ダッグアウトのリニューアルは、有限会社工藤板金工業様のご支援により実現したもので、以前からあったダッグアウトの骨組みを利用して外壁、内壁および防球ネットを新設いただきダッグアウトが生まれ変わりました。

7月9日より高校野球青森県大会が開幕。今年も「全国制覇」への挑戦が始まります。

ダッグアウトから見た
光星高校硬式野球部グラウンド

## 八戸学院美保野キャンパス

美保野キャンパスの並木